人の香り

作・石原 燃

登場人物

高田香織　……三十二歳。
高田淑子　……六十二歳。香織の母親。

高田家のリビング。
使い込まれて飴色になった家具。どこか懐かしい床のデザイン。
室内は几帳面に手入れされている。

舞台中央に布ばりのソファ。その手前に木製のローテーブル。
ソファにはピンチがついたままの洗濯物。
ローテーブルにはバラを生けた花瓶が置かれている。
シンプルな花瓶。小振りのイングリッシュローズ。
淑やかな濃いピンクの花弁が幾重にも重なる。
上手には腰高の棚。
電話や書類、箱ティッシュなどが整然と並んでいる。
その横にはゴミ箱。
壁には緑色のカーディガンが掛けられている。
カーディガンは着古されて、色も少し褪せている。
下手には大きな掃き出し窓。外は庭。
正面には扉が二つ。
上手側を出ると廊下。玄関や階段、娘の個室に繋がっている。
下手側を出るとキッチンである。

二〇一二年、五月の夜。
ソファに香織が座っている。
ベージュのロングスカートに白いシャツ。膝掛けをかけている。
シャツの生地はくたびれてあまり清潔そうではない。
スカートから覗いているのは右足だけ。
左足は膝から下がない。
傍らには松葉杖と無骨な皮の鞄が置かれている。
香織、自分の場所を確保するために洗濯物をどける。

洗濯物がピンチごと床へ落ちる。

上手の扉から淑子が慌ただしく入ってくる。
張りのあるTシャツとシンプルなパンツ。春らしい色の上着。
淑子は義足を抱えている。
使い込まれた義足。
樹脂製の黒いソケットや金属部分が露出している。
淑子、息を整える。

淑子　ごめん、待たせて。（義足を差し出す。）ほら、これ。
香織　臭い。
淑子　え？
香織　バラ、なにこの匂い。
淑子　いつもと変わらないでしょ。（義足を下ろす。）
香織　（花瓶を指し）これ。
淑子　だって折角いただいたんだし。
香織　どっか持ってって。
淑子　バラに当たらないでよ。（義足を置き、花瓶を棚に移動する。）
香織　一緒だよ、そこじゃ。
淑子　……あとで上に持って行くから。（義足を持ち上げ）これ、前の。随分使ってないけど大丈夫かな。ちょっと着けてみて。
香織　擦れるんだよ、そのソケット。
淑子　しょうがないでしょ、新しいの作り直すまでは。
香織　置いといて。
淑子　着けないの？
香織　後で。
淑子　どっか痛むの？　大丈夫？

膝掛けの上から香織の左足に触れようとする。

香織　触らないで。

（間）

香織　もう寝るだけだから。
淑子　大丈夫なの？
香織　なにが？
淑子　え、足。
香織　義足？

淑子　足よ、あなたの。
香織　ああ足ね。
淑子　……ねえ、なにがあったの？
香織　そこ開けて。

淑子、香織に身体を寄せる。

淑子　話せるでしょ、私には。
香織　換気。
淑子　こっち見なさい。
香織　（はじめて淑子を見て）化粧崩れてる。
淑子　そんなこといいから。
香織　人の顔には文句つけるくせに。
淑子　慌てて行ったんじゃない。動けなくなったって言うから。なのに車の中でも黙ったままで。
香織　別にいいけど、すっぴんでもなんでも。
淑子　説明して、お願いだから。
香織　窓開けてよ。
淑子　開けたって変わらないわよ。
香織　じゃあ、いい。

松葉杖に手を伸ばす。
淑子、仕方なく窓をあけてやる。
庭の空気が入ってくる。新緑。バラの香り。

淑子　（外の空気を吸い込み）ね。
香織　……。
淑子　（庭のバラを見て）満開なのよ、久しぶりに晴れたから。見える？
香織　もういい、閉めて。
淑子　……。
香織　閉めてってば。

淑子、窓を閉める。

香織　のど乾いた、水ちょうだい。
淑子　ねえ、なにがあったの？
香織　水。
淑子　どうしたっていうの、ほんとに……。

香織、淑子を見上げる。
淑子、キッチンへ行く。
香織、花瓶のバラを見る。
鼻に両手をあて、その匂いを嗅ぎ、両手を見つめる。
淑子、水を注いだグラスを持ってくる。

淑子　わからないのよ、どういうことなのか。（グラスをテーブルに置く）だって、わからないじゃない、そんな風に黙ってたんじゃ。
香織　盗まれたって言ったでしょ。
淑子　それは聞いた。だけどただそう言われたって。
香織　外してたら持って行かれちゃったの。
淑子　どうしてそんなこと。
香織　セックスする為に決まってるでしょ。
淑子　……。
香織　ラブホテルでピクニックしてると思った？
淑子　そうじゃなくて、どうして義足なんか盗って行くのかって言ってんの。
香織　さあ、マニアだったんじゃない。
淑子　誰なの？　相手は。
香織　（水を飲み）知らない人。
淑子　……連れ込まれたの？
香織　したかったからついて行った。それだけ。
淑子　嘘、あんな声で電話してきて。
香織　空調のせい、鼻が止まんなかったの。
淑子　入ってなかった、空調なんて。
香織　飲んでたから。
淑子　飲まされたの？
香織　（グラスをテーブルに置き）飲んでたの、一緒に。
淑子　だってそいつなんでしょ、義足盗んだの。そいつ？　そいつら？
香織　強盗団じゃないんだから。
淑子　乱暴されてないの？
香織　セックス？　したよ、それなら。
淑子　だから、それって。
香織　カーディガン取って。

淑子、カーディガンを取る。
香織、鼻を両手で覆い、その匂いを嗅ぐ。

淑子　（カーディガンを渡し）やっぱり病院行った方が……。
香織　通報しないって言ったじゃん。

淑子　しないわよ、そうじゃなくて。
香織　でも。
淑子　警察は嫌なんでしょ、わかってるから。
香織　いいの？　義足高いのに。
淑子　百五十万くらいなによ。身体は代えが利かないんだから。
香織　そうかな。
淑子　警察は行かなくていい。だけど病院は……
香織　何科に行くの？　精神科？　リハビリ科？　それとも……
淑子　一緒に行ってあげるから。
香織　いい。
淑子　緊急避妊薬飲むなら早いほうがいい。疲れてるだろうけど、夜間にやってるとこ探して。
香織　セックスしただけだって言ってるでしょ。
淑子　本当に？　本当に心配ないの？
香織　大丈夫だってば。
淑子　避妊、したのね。どうなの？
香織　するわけないでしょ。
淑子　全然大丈夫じゃないじゃない！
香織　だって面倒でしょ、つけて、とか言うの。
淑子　言える状況じゃなかったんでしょ。
香織　違うって。
淑子　だって三十分よ。私が行くまで三十分もあったのに、荷物は投げ出されたまんまだったし、受話器も外れっ放し。どうみても普通じゃなかった。
香織　わかった。明日行くから。
淑子　でも。
香織　いまは無理。動けない。
淑子　……可哀想に。怖かったでしょう。
香織　だからレイプじゃないってば！　普通にセックスして、それから義足盗まれた。それだけ。
淑子　だって。
香織　もう、決めつけるなら行かないから。
淑子　違うのね。信じていいのね。ねえ、どうなの？
香織　行って欲しいの、欲しくないの、どっち？
淑子　行って欲しいわよ、そりゃ。
香織　じゃあ、もういいでしょ、話は終り。
淑子　だってなにがなんだか全然わからないじゃない。違うなら違うでちゃんとわかるように説明してよ。

電話が鳴る。

香織、電話を見る。

淑子　お願い、始めからちゃんと話して。誰にも言ったりしないから。ホテル街に何しに行ったの？

香織　……。

淑子　ねえ、昼に家出て、それからどこでなにしてたの？

香織　鳴ってる。

淑子　ごまかさないでちゃんと話して。家じゃ気が散るから外で書いてくるなんて言って、あなたパソコンも持ってなかったじゃない。

香織　鳴ってるってば。

淑子　そりゃ鳴るわよ、電話は！

電話切れる。

香織　切れちゃった。

淑子　大事な用ならまた掛けてくる。それより話して。その男とどこで会ったの？　ねえ、香織。

香織、電話を見つめている。

淑子　誰か掛けてくる予定でもあるの？

香織　そういう訳じゃない。

淑子、香織を見つめる。

鞄の中で香織の携帯が鳴る。

携帯に二人の視線が注がれる。ほんの数秒。

香織、鞄に手を伸ばす。

淑子、鞄を奪う。

香織　何すんの。

淑子、携帯を出して相手を確認する。

香織、携帯をひったくる。

相手を確認し、安堵。携帯に出る。

香織　はい。……お疲れ。今うちに電話した？　……そっか。いや、電話鳴ってたみたいだったから。

淑子、上着を脱ぐ。ソファの背もたれに掛ける。

香織　……うん。……え、これから？　ごめん、今日はちょっと。……ああ、名前は聞いたことある。……うん。……そうなんだ。すごいね。……うん、でも、今日は無理。……ごめん。……あ、今日までだっけ。……ううん、出してない。……今回はいいかなって。……えー、そんなこと言われても……うん、わかった。じゃあ、書いてみるよ。……あらすじだけでいいんだよね。……明日までね。日付変わるまでいいんだよね。……うん、わかった。沼田先生によろしく。……はい。

電話を切る。

淑子　電話。
香織　堀川くん。同人誌の。なんか評論家と飲んでるんだって。同人誌読んで推してくれるかもしれないからって。んなわけないじゃんね。
淑子　番号教えたの？　その、犯人にも。
香織　教えるわけないでしょ。
淑子　だけど。
香織　あ、そうだ。同人誌、自費でやることになったの。
淑子　え？
香織　一人五万だって。
淑子　ああ、そう。それより。
香織　貸してね。
淑子　え？
香織　五万。
淑子　そんな急に言われたって。
香織　百五十万くらいなんでもないって言ったじゃん。
淑子　それとこれとは。
香織　冗談。真面目に取らないでよ。
淑子　……。
香織　いいよ。バイトでもしてなんとかする。なんかネットで話したらお金くれる人がいるんだって。感動できる話だったらなんでもいいからって。
淑子　わかった、ホテルでのこと聞いたら、ちゃんと考えるから。まずは聞かせて。お金の話はそれから。
香織　そんな悠長にしてらんないんだけど。
淑子　あなた事件に会ったのよ。それより大事なことなんてある？
香織　終わったこと考えてもなんにもならないでしょ。
淑子　そうやって現実から逃げたって何も解決しないのよ。どんどん話しづらくなるだけじゃない。
香織　もういい。女ってどうしてこうなんだろ。

淑子　親に向かってなんてこと言うの！
香織　別にお母さんのこと言ったんじゃない。
淑子　じゃあ誰のことよ。あなた私としゃべってたんじゃない。私のこと言ってるとしか思えないじゃない。
香織　はいはい、誤解させてすみませんでした。
淑子　なんでそういう態度とるの？　人の気持ち逆なですることばっかり言って。
香織　ジャージは？　部屋？

立ち上がろうとする。
淑子、その腕を掴む。

香織　ちょっと、放して。

手を振り払う。松葉杖に手を伸ばす。
淑子、松葉杖を奪う。立ち上がる。

香織　なにすんの、返してよ。

淑子、後ずさる。

淑子　話終ってない。
香織　着替えたいんだよ。
淑子　話してくれるまで部屋に入れない。
香織　勘弁してよ。
淑子　もっとちゃんとわかるように話してくれなきゃ。
香織　これじゃトイレにも行けないじゃん。
淑子　行きたかったら話しなさい。

香織、義足に視線をやる。
淑子、義足も抱える。松葉杖と義足が腕の中にある。

香織　返して。
淑子　（自分に言い聞かすように）駄目。
香織　じゃあパソコン。
淑子　は？
香織　持ってきてよ、部屋から。
淑子　そんなものどうするの。
香織　聞いてたでしょ。明日までにあらすじ書かないといけないの。
淑子　こんな時に小説なんて。

香織　約束しちゃったから。しょうがないでしょ。前から締め切りは決まってたんだから。
淑子　たかが同人誌じゃない。
香織　仕事だと思ってやれって、お母さんだって言ったじゃん。
淑子　今日はもう寝るんじゃなかったの？
香織　書きたいことが浮かんでるんだってば。
淑子　だったら後でゆっくり書けばいい。話すのが先。
香織　もう……

再び電話が鳴る。
二人、はじかれたように電話を見る。
淑子、松葉杖と義足から手を放す。
受話器に飛びつく。電話に出る。

淑子　もしもし……あ、弓枝さん？　ああ、ごめんね……ううん、なんでもないの。

香織、松葉杖に手を伸ばす。
淑子、松葉杖と義足を抱え直す。

淑子　さっきはごめんなさいね。突然帰ってもらっちゃって。心配したでしょ。取り乱しちゃったから。……うん大丈夫、大したことないの。ちょっとバイクに引っ掛けられて。

香織、鞄からノートとペンを出す。ノートを開く。メモを書く。

淑子　ううん全然、怪我もしてないし。……そう、だから心配しないで。……ありがとう。……朗読会のことはまた改めて。……はい。じゃあ。

電話を切る。

香織　来てたんだ。
淑子　ちょっと朗読会のことで。

受話器をホルダーに戻す。

香織　バイクってどんなやつ？
淑子　どんなって普通のよ、その辺に止まってる。
香織　どこで引っ掛けられたの？

淑子　どっか、その辺の……
香織　具体的に言ってくんないとわかんない。色は？
淑子　意地悪言わないでよ。あなたのことじゃない。
香織　今度会った時あの人絶対聞いてくるよ。
淑子　大丈夫よ、納得してたから。
香織　もうちょっと考えて嘘つけばいいのに。怪我ぐらいしてなきゃおかしいでしょ。
淑子　しょうがないでしょ。とっさに思いつかなかったんだから。
香織　いいけど、別に。

メモを書く。

淑子　なに書いてるの？
香織　……。
淑子　小説？
香織　……。
淑子　話すのが先だって言ってるでしょ。
香織　あの電話、何時だったっけ？
淑子　は？
香織　（携帯を確認して）まだ七時前だったんだ。（メモを書く。）
淑子　今日のこと書いてるの？
香織　うん。
淑子　ちょっ、待って。どうして？
香織　こんな経験書かないでどうすんの。
淑子　そんなの書けるわけないじゃない。私にさえ話せないくせに。
香織　小説だから。
淑子　意味がわからない。やめなさいよ、書くの。
香織　お母さんも後で読めば。何があったか知りたいんでしょ。
淑子　書くなって言ってるんでしょ、私は。
香織　どうして？　矛盾してるじゃない。知りたいって言うから読めばって言ってるのに。
淑子　矛盾してるのはあなたでしょ。警察行きたくないって言ったのは、人に知られたくないからじゃなかったの？
香織　フィクションだから。
淑子　ノンフィクションじゃない。
香織　小説って言ったらフィクションになんの。
淑子　義足の人間が義足盗まれる話なんか書いたら、誰だってそれに近いことがあったんだと思うでしょ。
香織　好きに解釈すればいい。どう読もうが読者の勝手。

淑子　わかってるの？　人に知られるっていうことがどういうことか。
香織　傷物は結婚できないとか、そういうこと？
淑子　そうじゃなくて。いいように消費されるってことよ。小説の善し悪しなんかそっちのけで、あなたの私生活だけが注目されて。
香織　それでも本は、僕たちの内部の凍結した海を砕く斧でなければならない。
淑子　なにそれ、誰の言葉？　どうしていつも訳のわからないことばっかり言うのよ。
香織　わからないよね。
淑子　本になんかしなくたってちゃんと聞いてあげる。駄目なの？　それじゃ。
香織　駄目に決まってる。
淑子　どうしてよ。私はあなたの母親なのよ。
香織　だからだよ。
淑子　え？
香織　他の誰に話せても、お母さんには話したくないの！

（間）

淑子　どうしてそんなこと言うのよ。
香織　しつこいから、いつまでもグジグジと。
淑子　心配してるんじゃない。
香織　バイクに引っ掛けられたなんて、バレバレな嘘ついて。
淑子　私はただ……
香織　どうせなら地雷原に寄付したとか言えば美談になるのに。
淑子　……。

香織、メモを書く。
淑子、しばらく香織を見つめている。
グラスを手に取る。立ち上がる。
キッチンへ入る。
香織、メモを書いている。
淑子、戻ってくる。

淑子　（明るく）なにか飲む？　暖かいものでも。
香織　気持ち悪っ。
淑子　ホットミルクは？　暖まるよ。
香織　いらない。寒くない。

淑子、洗濯物の前に座る。
ピンチを外し始める。

淑子　いい匂い。お日様の匂いがする。

洗濯物をたたむ。

香織、無視して書き続ける。

淑子　ねえ。

香織　……。

淑子　一緒にたたまない？　そんなの書いてないで。

香織　……。

淑子　昔よく手伝ってくれたじゃない、たたみながら歌歌ったりして。

香織　……。

淑子　楽しいよ、ほら。

洗濯物を差し出す。

香織、無視して書き続ける。

淑子、差し出した手を下ろす。

洗濯物をたたむ。作業は一向に捗らない。

淑子　弓枝さん、張り切ってるんだよ、来月も朗読会やろうって。

香織　……。

淑子　今度はいつもの和室じゃなくて、入ってすぐの……、ほら選挙のとき投票所になる……ねえ、ほら……。

香織　大会議室。

淑子　そう、そっちでやりたいんだって。この間和室でぎゅうぎゅうだったでしょ。区内報に載ってから急に人が増えちゃって。浅井さんでしょ、佐藤さんに木村さん、あと市川さんとこのおばあちゃんも。あなたの文章のおかげね。

香織　……ただの案内文でしょ。

淑子　レポートって形式が良かったのよ、臨場感があって。

香織　……。

淑子　これだけ人が集まったんだから、発表会もしてみたいって言ってるのよ。弓枝さんなんか今度お芝居のワークショップにも行ってみるって。

香織　……。

淑子　あなたもまた来るでしょ？　ね、来るよね？

香織　いいよ、私は。

淑子　どうして？　やっとメンバーの名前覚えてきたとこじゃない。

香織　……。

淑子　皆、いい人でしょ？　あ、足置きのこと、弓枝さんにお礼言わなくちゃね。義足で座りっぱなしだと浮腫むんじゃないかって、わざわざビールケースにク

ッションひいて持ってきてくれたんだから。

香織、顔をあげる。

淑子　なに？　どうした？
香織　静かにして。
淑子　……。

香織、メモを書く。

淑子　そうだ、相談に乗ってくれない？　どの作品読むか。
香織　参考になんないよ、私の意見なんか。
淑子　今のところは「最後の一葉」にしようかと思ってるんだけど。
香織　……。
淑子　またOヘンリーだって言いたいんでしょ。
香織　別に。
淑子　だからね、そのままじゃなくて、弓枝さんが書き換えたのよ。
香織　ふん……。
淑子　壁のツタから葉っぱが全部落ちたら、自分は死ぬんだと思ってる女の子がいるでしょ。それはそのまんまで。
香織　……。
淑子　壁に葉っぱの絵を描くのをおじいさんじゃなくて、同じ年頃の女の子たちにするの。一人じゃなくてたくさん。みんなそれぞれに悩みを抱えてて、お互いにエールを送り合うのね。それで最後はみんなで元気になる。誰も死なないの。ね、いいでしょ。フェミニズムの視点も入ってて。
香織　……。
淑子　ねえどう思う？　ねえ。
香織　いいんじゃない、教科書みたいで。
淑子　……だったら何がいいと思うの？
香織　え？
淑子　いいじゃない、聞かせて。あるんでしょ、あなたのお薦め。
香織　うるさいなあ。Oヘンリーやればいいじゃん。
淑子　浅井さんも言ってた。「きっと僕なんかが知らない話沢山知ってるんでしょうね。そういうの聞いてみたいなあ」って。

香織の手が止まる。
顔を上げて、淑子を見据える。

淑子　なに？

香織　ある家族がドライブする話は？
淑子　え？
香織　私のお薦め。
淑子　ああ、どんな話？
香織　ドライブ中にちょっと寄り道するの。お婆さんの思いつきで、ある屋敷を見るために。
淑子　うんうん。
香織　でもその記憶は間違いで車は崖から落っこちちゃうの。
淑子　え。
香織　家族は通りかかった車に助けを求めるんだけど、それは脱走中の犯罪グループの車でね、家族はあっという間に取り囲まれてしまう。
淑子　……。
香織　だけどこの犯人の一人が意外と紳士的でね。銃を向けながらもお婆さんをちゃんとレディとして扱うの。お婆さんはこの人だったら命を助けてくれるかもしれないと思って「あなたはいい人だ、そこらの人とは全然違う」って必死におだてて命乞いするの。
淑子　（ハッピーエンドを予測して）わかったそれで。
香織　だけど結局犯人は、なんの躊躇もなく家族を皆殺しにするって話。
淑子　……。
香織　面白いでしょ？
淑子　え、ああ、そうね。
香織　面白くなかった？
淑子　なんていうの、タイトルは？
香織　「善人はなかなかいない」。
淑子　……。
香織　だから言ったじゃない、参考にならないって。
淑子　いや読んではみたいんだけど……お年寄りにはちょっと……。
香織　わかったら、もう邪魔しないで。
淑子　……。

香織、鼻を両手で覆い、その匂いを嗅ぐ。
メモを書く。
淑子、洗濯物をぼんやりと見つめる。
ゆっくりたたみだす。

淑子　いつもそう。
香織　……。
淑子　端っからわからないって決めつけて。あなたから見たらつまらない人間に見えるかもしれないけど、私だって教師としてそれなりに闘ってきたのよ。

香織　バラ片づけて。
淑子　……。
香織　臭くて集中できない。
淑子　なんでそんなこと言うの？　あなたの父親が出て行ったとき、バラだけは切らないでって頼んだのあなたじゃない。
香織　庭のを切れなんて言ってない。
淑子　この香り好きだったでしょ。あなたの父親といつも庭に椅子並べて、いい香りだねって楽しそうにしてたじゃない。私が手入れしてたってそばにも寄ってこなかったくせに。
香織　だから庭のじゃないってば。
淑子　一緒じゃない、バラはバラでしょ。
香織　あんな流行りもの。イングリッシュローズなんて香りは強いし花持ち悪いし、好きじゃない。
淑子　折角持ってきてくれたのに。浅井さんだって忙しいのよ。

香織の手が止まる。

淑子　初めてでしょ、誕生日にバラなんて。それもわざわざ家まで持ってきてくれて。
香織　近所まで来たついでだよ。
淑子　浅井さんのこと、どう思ってんの？
香織　……。
淑子　いい人じゃない。「何しに来た」なんて言われても嫌な顔ひとつしないで。恥ずかしそうにバラ抱えて。上がってってもらえば良かったのに。
香織　いいでしょ、別に。
淑子　ああいう人なかなかいないよ。朗読会じゃいつも一番に来て椅子並べるの手伝ってくれて。ニコニコしてるもんだからこっちもつい甘えちゃうけど。
香織　……営業だから。
淑子　あれは意外と苦労してると思うよ。人が来る度にいちいち手止めて挨拶するでしょう。ああいう不器用なタイプは企業には向かないもの。
香織　……。
淑子　育ちがいいんでしょうね。ご両親、地方の大学で教えてるって言ってたでしょ。ほら、いつも持ってるボストンバッグ。随分年季が入ってると思わなかった？　あれ、お父様から譲ってもらったんですって。なんでも捨てちゃう世の中でいいじゃない、そういうの。貧乏性なだけですよ、なんて笑ってたけど。ああいう鷹揚な感じってちゃんと大事にされて育った証拠よ。
香織　……。
淑子　思うんだけど、彼、あなたのこと好きなんじゃない。
香織　（笑おうとして）……やめてよ。

淑子　だって、あなたが来るとぱっと顔赤らめるし。
香織　やめてって。
淑子　なによ、照れちゃって。
香織　……。
淑子　どうしよう、言っちゃおうかな。本当は言わないでって言われたんだけど。このバラね。この間の朗読会の時にあんまりあなたの話ばっかりするもんだから、今度誕生日だって教えてあげたの。そしたら彼真っ赤になっちゃって。母の日が近いからカーネーションしかないかもって慌てちゃって。
香織　……。
淑子　きっと幸せよ、ああいう人と結婚したら。
香織　女よ！
淑子　え？
香織　お前はいったいまやかしのほかになにを知っているというのか。

（間）

淑子　なんなの、急に。
香織　……
淑子　なにか気に障ることでも言った？
香織　……。
淑子　大丈夫よ、今日のことは言わなければ。気にすることない。あなたは悪くないんだから。

香織、笑い始める。

淑子　なにがおかしいの？

香織、笑い続ける。

香織　あいつだよ。
淑子　は？
香織　義足盗んだの。
淑子　え？　なんて？
香織　だから、あいつが義足を盗んだの。
淑子　は？

香織、メモを書き始める。

淑子　うそ……。

香織、書き続ける。

淑子　冗談でしょ、だって。

香織　……。

淑子　ちょっと待って。やめなさいよ、書くの。

香織、手を止める。

香織　だから「善人はなかなかいない」んだって。

淑子　嘘だ。だってあの人が。

香織　（鼻で笑って）不器用で育ちのいいあの人が？

淑子　だっておかしいじゃない！　どうして義足なんか欲しがるのよ！

香織　わかんないよ、そんなこと。

淑子　まさか、そんなわけない、あり得ない。

棚の上の書類をあさる。

香織　なにやってんの。

淑子　電話番号、名簿にあったはずだから。

香織　かかるわけないじゃん。

淑子　なんでわかるのよ、そんなこと。

名簿を見つける。
受話器を掴む。
電話をかける。

香織　かかった？

淑子　……あ、もしもし、浅井さん？　……え、あ、いえ、すみません。間違えました。

電話を切る。
もう一度番号を確認する。かけ直す。

淑子　……あ、もしもし、……あ、すみません……あの番号確認させていただいてもよろしいですか？　えーと……（相手が自分の番号を言った）あ、すみません……はい……はい……。あの、こちらの番号は以前から……ああ……いえ、すみません。はい……失礼します。

電話を切る。

香織　だから言ったのに。
淑子　知ってたの？　嘘だって。
香織　逃げてく時言ってた。無駄だって。全部嘘だからって。
淑子　そんな。

もう一度電話をかける。
今度は別の相手。暗記した番号。

香織　いくらかけても無駄だってば。
淑子　もしもし、弓枝さん？　高田です。夜分にごめんなさい。……ううん、大したことじゃないんだけど。この間の朗読会、浅井さん遅れてきたでしょ。……ううん、あの時弓枝さんの携帯に電話あったじゃない。……そう。あの番号わかる？　……うん、……わかった？　え？　公衆電話？　そう……。あ、うん、出席名簿ね、ああ、そうね、見てみる。……ううん、なんでもない。ちょっと聞きたいことがあって……。じゃあ、また電話するね。はい。

電話を切る。
香織の鞄が目に入る。
受話器を置く。鞄を掴む。中身をひっくり返す。

香織　なにすんの！

淑子、鞄を投げ捨てる。
散らばった品々。携帯を掴む。
辿々しい手つきで操作しようとする。

淑子　（苛ついて）これ、どうやって表示するの？
香織　履歴なんか残ってないって。
淑子　どうして。電話してきてたんでしょ？
香織　いつも公衆電話だったから。支払いとかつい忘れちゃうんだって。
淑子　こっちからは掛けたことなかったの？
香織　ないよ、電話なんかしたら気があるみたいじゃない。

淑子、再び受話器を手に取る。

香織　どこにかけるの？
淑子　警察、決まってるでしょ。

香織　なに言ってんの。いい加減に諦めなよ！
淑子　黙ってて。
香織　通報しないって言ったじゃん。
淑子　誰に知られたっていいんじゃなかったの？
香織　そうじゃなくて。嫌な思いしたくないんだよ。警察の取り調べなんて、嫌な思いするに決まってんでしょ。
淑子　捜索してもらうだけだから。
香織　同じだよ。
淑子　だから事件ってことじゃなくて。行方不明だって言えば。
香織　そんなの調べてくれると思う？　日本の警察はそんなに親切じゃない。
淑子　別に警察じゃなくたって。探偵とか。そうよ。黒い犬のポスター。
香織　探偵なんか高い金とられるだけだよ。義足だって作り直さないといけないのに、いいの、それで？

（間）

淑子　だって見ればわかるのよ。痩せてて、目が大きくて、それからひどい花粉症で。
香織　何万人いると思ってんの？　そういう人。
淑子　両親が勤めてる大学だってわかるかもしれない。
香織　そんなの嘘に決まってんじゃん。
淑子　昨日までそこにいたのに見つからないわけない。
香織　もー、見つけてどうすんの。
淑子　殺してやる！
香織　馬鹿言わないでよ。
淑子　とにかくあなたに謝らせる。それから義足取り返して……
香織　もういいよ、義足は。
淑子　取り返して欲しくないの？
香織　そんなこと言ったってしょうがないじゃない。
淑子　簡単に言わないでよ。今までどんな思いでやってきたと思ってんの？　いくらお金が懸ったってあなたが自然に歩けるなら、普通の足に見えるならって、学校には秘密で内職して、いい技師探して会いに行って。
香織　また買えばいいって言ったじゃん。
淑子　言った、言ったけど百五十万よ。
香織　百五十万くらいなんでもないんじゃなかったの？
淑子　五万が出せない人に何がわかるのよ。
香織　……。
淑子　ごめん、そうじゃなくて。
香織　（自嘲気味に笑い）いいよ、本当のことだから。

淑子　違うってば、そんなことが言いたかったんじゃなくて。（受話器をホルダーに戻す。）頑張ってきたのよ、ずっと。一人親だからって言われたくなくて。欲しいもの我慢して。節約して。この服だってもう十年以上着てる。新しい服なんてもう何年も買ってない。そうやって、やっと手に入れた私の願いだった。それをあの笑顔で持って行ったのよ。ニコニコ笑って、私を騙して！

香織　もう、わかったから。

淑子　許せない！　地獄に堕ちればいいのに！

香織　やめてよ、怖いって。

淑子　虫も殺さないような顔して腹の中じゃ舌出してたの？

香織　知らないよ、そんなこと。

淑子　出してたのよきっと！　おばさん達に囲まれながら、真っ赤な舌ベロッと。ちょん切ってやりたい。今すぐこの手で！

花瓶のバラを掴む。

淑子　痛っ。

憎しみを込めてバラをゴミ箱に捨てる。

香織　捨てなくたっていいのに。

淑子　飾っとけるわけないでしょう！

洗濯物の前に戻り、座る。

淑子　あんなもの持ってきて馬鹿にするにも程がある。

洗濯物をたたむ。
怒りで上手くたためない。
香織、ノートとペンを置く。

香織　喜んでたくせに。自分がもらったわけでもないのにはしゃいじゃって。

淑子　はしゃいでなんかない！

香織　そう？　慌てて化粧しに行ったじゃない。すっぴん見られたって恥ずかしがっちゃって。誰も気にしちゃいないのに。

淑子　もういい、もう何も聞きたくない。

香織　あんなに聞きたがっといて今更なに。

淑子　洗濯物仕舞わなくちゃ。しわになっちゃう。

洗濯物を抱える。半分をテーブルに置く。

淑子　これ、あなたの。

香織、淑子の手を掴む。

淑子　なにすんのよ。
香織　Oヘンリー好きなんですかって。
淑子　え？
香織　そう聞かれたの、四月の朗読会で。

淑子、香織の手を振り払おうとする。
抱えていた洗濯物がバラバラと床に落ちる。
香織、手を放さない。

香織　興味ないって私が答えて。
淑子　放してよ。
香織　上手いばっかりで、怒りが感じられない。横領で服役してるときに書き始めたくせに。刑務所で優遇されてたせいなんじゃないって。
淑子　わかったから、放して。
香織　ちょっとちゃんと聞いてよ。あの人笑ってた。そんなこと考えたことなかったって、困ったみたいに
淑子　……。
香織　苦労してない人にはわからないかもしれないけどってからかったら、僕はそんないい家の人間じゃありませんってむきになって。
淑子　……。
香織　それから私が書いたものの話になったんだよ。なんであんな話になったんだっけ、ああそうだ、ネットで私が書いたもの探したけど、エッセイ集しか見つからなかったって言われたんだ。
淑子　わかった、わかったからもうやめてよ。
香織　わかってんの？　ほんとに。学内誌に連載してたのまとめたやつだよ。朝日のコンテストで入賞した、覚えてるでしょ？
淑子　これ以上聞きたくない。手放して。
香織　聞きたかったんでしょ。
淑子　充分聞いた、もうたくさん。
香織　いまどき小説なんてなかなか出版されないんだって言ったら、あの人すごく残念がってね。仲間内で同人誌作ってるって話したら是非読んでみたいって。だから次の朗読会で貸してあげた。
淑子　いいから、もう。
香織　同人誌貸したのが日曜日で電話が来たのは水曜日だったかな。すぐに感想

伝えたいから近いうちに会いませんかって。
淑子　……告白されたの。
香織　感想言いたいだけならわざわざ会ったりしないでしょ？　たぶんそういうことだなって小学生だったの？　あなた。
淑子　……好きだったの？
香織　まさか。やめてよ。

手を放す。淑子、尻餅をつく。

淑子　好きでもないのにどうして会うのよ。
香織　いいじゃない、デートくらいしたって。
淑子　感想だけ聞いたらすぐに帰って来られなかったの？
香織　子供じゃないんだから。
淑子　だけど、そんな好きでもない人と。
香織　しょうがないでしょ、温室栽培ですくすく育ったトマトにしか見えなかったんだもん。お母さんだったらどうした？　私がデートするって言ったら。止めた？
淑子　……
香織　でしょう？

淑子、洗濯物を握りしめる。
香織、ノートを開く。ペンは動かない。

淑子　……すぐにホテルに誘われたの？
香織　始めは喫茶店でランチ食べてた。いろいろ話したよ、小説の話とか、いろいろ。そのうち一杯だけってビール飲んだら止まらなくなっちゃって。酔っ払って屈託なくしゃべってるあの人のシミひとつないツルツルの肌見てたら、眉間に皺の一本でも刻んでやりたくなっちゃったんだよ。
淑子　は？
香織　それにはセックスが一番かなって。
淑子　え？　どういうこと？
香織　どんなに気取ったってあの瞬間は皆まぬけ面だから。
淑子　意味がわからない。
香織　お母さん、意外と乙女だもんね。
淑子　全然意味がわからない。なんでそういうこと言うの？
香織　だって恥ずかしくて見てられなかったんだもん、バラ抱えて恥じらってるお母さん。
淑子　恥じらってなんかないわよ！
香織　よれよれのスーツ着た男が白馬の王子に見えちゃってるお母さんにも、こ

の世で一番美しい恋人どうしになったつもりのあいつにも、現実の厳しさってもんを教えてやろうと思ったの。

淑子　馬鹿じゃないの？　正気とは思えない。

香織　とりあえず店出ようってことになって外に出たら、あの人すっかりその気になってて、もう少し一緒にいるなんて出来ないよねって遠まわしに言うんだもん。笑っちゃった。

淑子　……。

香織　だから言った、「じゃあホテルにでも行く？」って。

（間）

淑子、洗濯物に手を伸ばす。

香織　……ねえ、覚えてる？　小学校の頃、スカートめくられた拍子に転んで怪我したことあったでしょ。

淑子、ゆっくりと洗濯物をたぐり寄せる。

淑子　さあ。

香織　ほら、遠藤って、太った子が犯人で。

淑子　覚えてない。

香織　あれだけ怒っといてよく言うよ。始めはまあまあなんて言ってたくせに、遠藤がどこまで義足か知りたかったって言った途端、火吹きそうな勢いで怒ったじゃない。

淑子　そんなに怒ってない。

香織　怒った怒った。先生まで土下座する勢いだったよ。

淑子　だって黙ってられないでしょ、あんな侮辱。

香織　あの時私思ったんだ。義足がくっついてるところを見たい欲求ってパンツを見たい欲求にも勝るんだって。パンツは誰でもはいてるけど義足つけてるのは私だけだから。

淑子、洗濯物に埋もれている。

洗濯物をたたもうとする。

香織　浅井さんにも言われたんだ。

淑子　（手を止める）……。

香織　義足と足がくっついてるところ、外して見せてって。

淑子　……。

香織　僕をからかってるんじゃなかったらって。

淑子　断わらなかったの？

香織　嫌だって言ったら、やっぱり本気じゃないんだって悲しそうにするんだもん。ホテルに入ってキスしたとき、自分は何度も愛してるって言ったのに、君は一度も言わなかったって。仕方ないから外して見せてやった。そしたらあいつ、今度は僕にやらせてって。もちろん断わったよ。嫌だよ、人につけたり外したりしてもらうなんて。でもどうしてもって食い下がられて、一回だけって。

淑子　もういい、話さないで。

香織　あいつ、優しく足をなでながら、義足を外して。それから、つけたり外したり。二度も三度も。

淑子　やめて！　聞きたくない！

香織　なんか変な気持ちになっちゃったんだよ。……この人と結婚したら、毎朝、毎晩、こうやって足をつけたり外したりしてくれるのかなって。

淑子　……。

香織　ああ、それもいいなあって。

淑子、洗濯物に顔を埋める。

淑子　私が誕生日なんか教えたから。

香織　やめてよ、そういうの。

淑子　バラなんかに騙されて信じちゃったから。

香織　私だって信じてた、あいつの表情が変わるまで。

淑子　あれって思うことはあった。だけど、深く考えなかった。サラリーマンがこんなとこ来るなんておかしいとも思ってたのに。そういう人がいたっておかしくない。きっとあなたに会いたいんだろうって。全部自分に言い訳して。

香織　しょうがないでしょ、そんなこと言ったって。

淑子　浅井さんと恋愛して、……一緒になってくれたらどんなにいいだろうって。……だって、あなたのこと全部わかって受け止めてくれる人だと思ったんだもん。義足のことも仕事のことも。

洗濯物で涙を拭く。

香織　ちょっと洗濯物で拭かないでよ。

淑子　拭いてない。

香織、棚の箱ティッシュを指し。

香織　そこ、ティッシュ。

淑子　（ティッシュを取って鼻をかむ）私にもうちょっと見る目があれば。

香織　のこのこ出かけて行ったのは私なんだから。

淑子　私もそれを望んでた。それがあなたの幸せになるんだって。

香織　別にお母さんのために行ったんじゃない。むしろその逆。ばかなこと考えた。それだけのこと。

ノートにメモを書く。塗りつぶす。
書く。塗りつぶす。
淑子、香織の洋服を一枚拾い上げる。

淑子　女っ気のない服ばっかり。
香織　ひらひらしたのが嫌いなの。
淑子　小さい頃はひらひらのもの欲しがってたのに。レースのついたブラウスとか、段になったスカートとか。
香織　お母さんだってそういうの好きじゃないでしょ。
淑子　私が押しつけちゃったのよね。女らしい服装なんてステロタイプだって。
香織　違うって。
淑子　……足切ってから、ほんとに華やかな格好しなくなった。
香織　こういう方が有利だって悟ったから。これでも私、結構モテるんだよ。
淑子　あなた、昔鞄投げつけたことあったよね。
香織　忘れた。
淑子　中学入った年。バレンタインのチョコいそいそ作って、なんだかおしゃれして出て行ったなあと思ったら、泣きながら帰ってきていきなり鞄投げつけて。そのまま部屋に入ったきりいくら呼んでも出てこなかった。
香織　やめてくれる？　過去のこと掘り返すの。
淑子　あなた何も言わなかったけど、本当はあの時私のせいだって言いたかったんじゃないの？
香織　そんなんじゃないよ。
淑子　骨髄炎で熱出した時すぐに病院に連れて行ってくれてたらって。
香織　失恋したショックで荒れてただけ。
淑子　風邪なんか寝てれば治るって言ったから。
香織　私も大丈夫って言った。何度も言ってるでしょ。義足だからってそんなに困ってない。今はこの足に満足してる。
淑子　連れて行こうと思ってたのよ。
香織　は？
淑子　でもあなたの父親が「病院連れて行った方がいいんじゃないか」って言うから。私だって思ってたのに、私より先に。
香織　……。
淑子　ずっと帰ってなかったくせに、帰ったとたんに父親面して。
香織　……。
淑子　あなたが病院行かなくていいって言った時、勝ったと思った。あなたは私を取ったんだって。父親よりもこの私を。

香織　そんなこと考えてたの？
淑子　そう思うよね。ほんとにバカだった。
香織　……。
淑子　私がつまらない意地さえ張らなかったら。
香織　もういいよ昔の話は。
淑子　ううん、良くない。もしもちゃんと病院連れて行ってたら、あなただってひらひらが好きなままでいられたはずだもの。
香織　別にひらひらなんか好きじゃなくたっていいでしょ。
淑子　そのままの自分を好きでいられたってこと。女らしいものを下に見たりしないで、女だってことに誇りを持ててた。そしたらきっと、あんな男に傷つけられずに済んだはずよ！

淑子、洗濯物で涙を拭く。

香織　なんて言って欲しいの？
淑子　え？

顔を上げる。

香織　なんて言って欲しいのかって聞いてるの。
淑子　……。
香織　やめてくれる？　馬鹿馬鹿しいから。
淑子　……なによ。

香織、メモを書く。

淑子　なに、なにがよ。

香織、淑子を一瞥する。視線をノートに戻す。メモを書く。

淑子　どうしてそういう目で見るの？

香織、無視して書き続ける。

淑子　私のことバカだと思ってるでしょ。

香織、書き続ける。

淑子　書くのやめて、こっち見なさいよ。

香織　……。
淑子　やめなさいってば！

ノートをひったくる。

香織　何すんの！
淑子　人が真面目に話してるのに、馬鹿にするのもいい加減にしなさい！
香織　お母さんのせいじゃないって言って欲しいだけでしょ。見え透いてんだよ。
淑子　そんなこと思ってない。悪かったって言ってるじゃない！
香織　よく言うよ。そんなこと思ってもいないくせに。お母さんはね、そうやって自分を責めるフリして人を悪者に仕立てるの。「私が悪い」って言われたらそんなことないって言うしかないもんね。そういうの偽善っていうんだよ。わかってる？
淑子　人のせいになんてしようとしてない。
香織　本当はなにもかもお父さんが悪いと思ってるんでしょ。
淑子　思ってない！
香織　じゃあどうしてお父さんが出てくるの。ずっと帰ってこなかったとか、父親面したとか。
淑子　あの人のせいにしたいんじゃない。だけど。
香織　だけど、なに。
淑子　あなたは何も知らないから。
香織　お父さんのことなら知ってる。
淑子　なにを知ってるって？　笑わせないで。
香織　浮気してたんでしょ。
淑子　……。
香織　お母さんよりずっと若くて綺麗な人。
淑子　あの子は。
香織　ごまかさなくたっていいよ。二人で会ってるとこ何度も見たから。
淑子　違う、そうじゃなくて。
香織　婚姻届出しとけばよかったんじゃない？
淑子　は？
香織　意地張って、名字にこだわるから。
淑子　そのせいだって言うの？
香織　そうじゃないけど。そしたらもっと慰謝料取れたんじゃない？
淑子　あの子、あの人の娘よ。
香織　え？
淑子　あなたの父親がまだ学生だった頃に産ませた子。
香織　どういうこと？
淑子　学生のとき、助手の人と付き合ってたんだって。その人、教授になって別

の大学行っちゃったから、子ども産んでるなんて知らなかったんだって。
香織　その子どもがあの人……
淑子　あの子、美大の学生だった。なんだかよくわからない油絵書いてて。いつだったか、あなたが骨髄炎になる前、知り合いが個展やるからって一緒に観に行かされた。娘だなんて知らないから、喜んで庭のバラ持って行った。
香織　それで？
淑子　その帰りに言われたのよ。あの子の母親と一緒になりたいって。俺にはあの親子が必要なんだって。
香織　嘘。
淑子　ずっと忘れられなかったんだって。彼女とは一輪の花について何時間でも語り合えるって。笑えるでしょ。きもち悪い。お前は、花の一つ一つをちゃんと見たこともないだろうって。あるわけないでしょ。花なんかに見とれてたらすぐ虫がつくんだから。花が枯れたら花がらを摘まなくちゃいけないし、雑草だってどんどん生えてくる。こっちは仕事から疲れて帰ってきて、やっとの思いで手入れしてるのに、花を楽しむ暇がどこにあるっていうの？
香織　世話、頼まれたわけじゃないでしょ。
淑子　頼まれたわよ。誕生日に苗木買ってきて大切にしてくれって。だから世話してきたんじゃない。冷たい風びゅーびゅー吹く中スコップ持って一日中庭に這いつくばって、土にまみれて。肥料と消毒薬と潰したアブラムシの匂いしかしなかった。生徒に言われた。先生、牛の匂いがするって。だけど、あなたの父親がくれたバラだから。あなたと二人で花が咲くのを楽しみにしてると思うから、喜んでもらいたくて。それなのにこんな。酷いじゃない。裏切りよ。
香織　もういい。
淑子　急にミミズになったみたいだった。人目につくこともなく、土の中で一生懸命働いてたら、花を見に来た人間に踏み潰された。
香織　わかったから。ノート返して。
淑子　訂正しなさい。
香織　はあ？
淑子　名字変えたくないって言ったせいじゃない。
香織　そんなこと言ってない。
淑子　言った。婚姻届出しとけばよかったって。言いなさい。間違ってたって。そのせいで駄目になったんじゃない。これだけは譲れない
香織　お父さんが悪かった。義足になったのはお父さんのせい。これでいい？
淑子　……。
香織　ノート返して。
淑子　……。
香織　いまの、メモしておきたいから。
淑子　は？
香織　お母さんの恨み節。

淑子　馬鹿なこと言わないで。冗談じゃない。
香織　ミミズのくだりなんか面白かった。足切ってからはどうだった？　どんな気持ちで土掘り返してたの？
淑子　なんなの。
香織　最後はどっちが切り出したの？　お父さんが出て行ってほっとした？　どうして引き下がろうと思ったの？　ねえ、教えてよ。
淑子　なんでそんなこと言わなくちゃいけないの。
香織　よくぞ書いてくれたっていうもの書いてあげるから。
淑子　あなたになんか書けるわけない。
香織　そんなのやってみないとわかんないでしょ。早くノート返して。
淑子　私の気持ちがわかってたまるもんですか。
香織　いいから返してよ。
淑子　嫌、絶対渡さない。
香織　早く！
淑子　なによ、こんなもの！

ノートを破く。床に叩きつける。
バラバラになったページが散らばる。

香織　何すんの。

淑子、散らばったノートを見ている。

香織　早く拾ってよ。

淑子、一枚を手に取る。次の一枚。また次の一枚。
そこに書かれたメモは全て黒く塗りつぶされている。

淑子　全部消してあるじゃない。
香織　……。
淑子　ねえ、これ。
香織　お母さんがうるさいから。
淑子　あなた書けないの？
香織　これから書くの。黙っててくれればすぐ書ける。
淑子　書けないんじゃない、やっぱり。
香織　そんなことないってば。返してよ！

淑子からノートを引ったくる。白紙のページを探す。
メモを書く。塗りつぶす。書く。塗りつぶす。

淑子　書けやしないわよ。
香織　書ける。書けないはずない。

書く。塗りつぶす。書く。塗りつぶす。

淑子　あきらめなさいよ、書けないんだから。
香織　うるさい、黙ってて！
淑子　書かなきゃいいじゃない、書けないんだったら。
香織　書かなかったらこのままここで止まっちゃうじゃない。
淑子　なにが？　なにが止まるっていうの？
香織　書けないはずない、ずっと書いてきたんだから！
淑子　なに言ってるの？　意味がわからないわよ。
香織　（鼻に両手をあて息を吸い込んで）どうしよう、匂いが消えちゃう。もうよくわかんなくなってきちゃった。
淑子　いいじゃない。そんなのさっさと忘れなさいよ。
香織　忘れないよ。鉄のドアが閉まる音も、這って行ったカーペットの感触も、やっと掴んだ椅子の軽さも。……全部書いてやるんだから。誰がなんて言ったって書き残してやるんだから。

書こうとする。なにも書けない。
ノートとペンを床に投げ出す。
（間）
淑子、ゆっくりと散らばったノートを集める。ペンを拾う。
ノートとペンをテーブルに置く。
鞄を拾う。散らばった中身を拾い、鞄に入れる。
香織の横に鞄を置く。
香織、鞄を見つめる。

香織　義足のついでだったの。
淑子　なにが？
香織　あいつの目的は義足だった。身体になんか興味なかった。
淑子　え……。
香織　あのボストンバック。
淑子　父親からもらった。
香織　あれにコレクションしてるんだって。義手とか義眼とか。私の義足も仕舞ってた。
淑子　……。
香織　見せてくれたよ、どっかの障害者から騙し取った義眼。同じやり方で取っ

たって言ってた。愛してるならはずして見せてって。ゴロッとしてて血管まで本物そっくりだった。

淑子　まともじゃない、狂ってる。

香織、鞄を両手で持ち上げる。

香織　あいつ言ってた。笑いながら、私を物みたいに見下ろして。

鞄を見下ろす。

香織　君は苦労が人を成長させるって思ってるみたいだけど、僕はそうは思わない。人間は自分の不幸を直視出来るほど強くない。自分に都合のいい言葉にすがろうとするんだ。だから苦労すればするほど騙しやすい。

淑子　やめてよ！

鞄をはたき落とす。

香織　例えば白い杖を持った女に声を掛ける。大丈夫ですかって優しい声で。女は大抵頬を上気させて嬉しそうにこっちを見上げる。今までの苦労が全部報われたみたいにね。その瞬間、僕は白い杖を蹴飛ばすんだ。思いっきり。相手は訳も分からず這いずり回る。そしてやっと騙されたことに気が付く。怒り。恐怖。表情がみるみる変わる。わくわくする。たまらないよ。そして最後の希望を取り上げる。彼女の白い杖。女は絶望の底に沈んでいく。どこまでも。どこまでも。

淑子、突然立ち上がる。

窓に駆け寄る。

香織　ちょっと！　なに？

窓を開ける。庭に飛び出す。

香織　どこ行くの？　サンダルくらい履きなさいよ！

大きな物音。物置の中身をひっくり返す音。

香織　何やってんの？　ちょっと。

身体を精一杯乗り出し、庭を見る。

香織　危ないじゃない、そんなもん持ち出して何するつもり。ちょっと変なこと考えてるんじゃないでしょうね。あいつはもう捕まらないんだよ！　……お母さん？　何する気？　怪我するよ、そんなもの素手で掴んだら……ああ！　ちょっと！　なにやってんの！　お母さん！　聞えないの？　やめてってば！　葉っぱだけになっちゃうじゃん。やっと咲いたのに！　やめてよ。これ以上切らないで！

辺りを見回す。ティッシュの箱を掴む。投げる。
辺りを見回す。鞄には手が届かない。
ノートを投げる。重さがなくて届かない。

香織　わかった、わかったから、もうやめて。ずっと育ててきたバラでしょ。あんなに喜んでたじゃない、今年は黒点病もウドンコ病も大丈夫だったって。どうしてそんなことすんの。ね、やめて！　お願い、お母さん！

その場にへたり込む。

香織　まだ蕾だってあったのに……

淑子、両手を傷だらけにして、部屋に入ってくる。

淑子　切ってやった！　切ってやった！
香織　……なにやってんの？　気でも違った？
淑子　見て！　全部切ってやった！
香織　なんなの一体？　手怪我してるじゃない。
淑子　安心しなさい、復讐してやったから。もう二度と誰もあなたを傷つけたりしないから。もっと早く切れば良かった、あんなバラ。あなたの父親が出て行った時にあなたが泣こうが叫ぼうが切ってやればよかった！　そしたらもう一度信じようなんて思わないで済んだのに。馬鹿にして。冗談じゃないわ。バラが好きな奴なんてみんな死んでしまえばいい！

香織、呆然と淑子を見つめる。

（長い間）

淑子、両手の血を洋服で拭う。
ゆっくりと散らばった洗濯物を集める。
鞄を拾う。中身がこぼれていたら拾って鞄に詰める。

鞄を香織に渡す。

淑子　やっぱり行こう、病院。

香織、鞄を受け取る。

香織　レイプ、されたんだね、私は。

淑子　……。

香織　あいつが出て行った後、震えが止まんなかった。なんとか這って、ドアまで行って、チェーンかけて。服着ようとしても、ボタンがはめらんないんだよ。電話もちゃんと番号押せなくて。そっか。だからか。これはレイプなんだね。ただのセックスじゃない。……だけど、やっぱりわからない。わかんないんだよ。なにが起きたのか。あれはなんだったのか。考えが止まっちゃうんだよ。考えなくたってわかると思ってたのに。普通の人にはわからなくても私にはわかるって。だって普通の足じゃ歩けない特別な道を歩いて来たんだもん。……そう信じてたのに……違うんだね、特別な道なんてなかったんだ。

淑子　特別よ、あなたが歩く道は。決まってるじゃない。

（長い間）

香織　（ぽつりと）警察に届出す。

淑子　え？

香織　義足取り戻したい。

淑子　……うん、そうしよう。

淑子、立ち上がる。

義足と松葉杖を香織の側に置く。

香織　お父さんと別れてよかったよ。

淑子　え？

香織　一輪の花について何時間でも語り合うとか、まじ、きもい。

淑子　（少し笑う）

香織　それでも本は、僕たちの内部の凍結した海を砕く斧でなければならない、なんて。私、凍結した海がそこにあることすら見えてなかった。

淑子　書くのやめるの？

香織　書くよ。それしかできないんだから。

（間）

淑子　ちょっと休んでなさい。準備してくるから。
香織　どこ行けばいいかわかってるの？
淑子　都立病院に電話してみる。あそこ夜間診療してたと思うから。
香織　（残った洗濯物を指し）これは？
淑子　明日でいいよ。腐るもんじゃなし。

集めた洗濯物をソファに乗せる。
香織、その様子を見つめる。
開いた窓から春の風が舞い込む。
五月の夜の風。木々の匂い。

香織　あ、バラの香りがする。
淑子　……しないわよ、そんなもの。
香織　するよ、ほら。

淑子、立ち上がる。
テーブルに乗せた洗濯物を抱える。

淑子　部屋に持っていっとくわね。
香織　（淑子を見ずに）……ありがとう。

淑子、部屋を出る。
香織、ゆっくりと散らばったノートを集め、整える。
香織の目から涙が落ちる。
それは香織の意思とは関係なくあふれてくるように見える。
香織、洋服の袖で涙を拭う。
でも涙は止まらない。
淑子、戻ってくる。
香織、ノートを開く。涙を拭いながら、毅然とページをめくる。
淑子、かける言葉が見つからず、いつまでもその場に立ちつくす。

溶暗

幕

（第十三稿　二〇二五年五月三十日）

主要参考文献　フラナリーオコナー「田舎の善人」

「善人はなかなかいない」
O・ヘンリー
「最後の一葉」
参考文献　カレル・チャペック「園芸家一二ヶ月」
引用　フランツ・カフカ「夢・アフォリズム・詩」

この作品は、フラナリーオコナー「田舎の善人」のオマージュとして書き上げた作品です。
上演の際には、その旨、パンフレット等に記載してください。